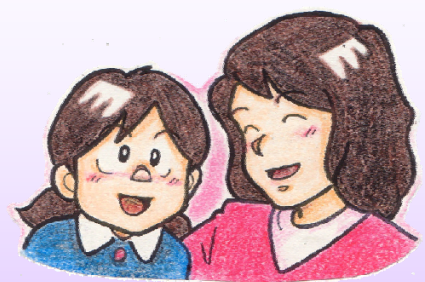




通常学級における特別支援教育の観点から見た
学級経営・授業づくり

この指導資料は、通常学級における特別支援教育について、「学級経営と授業づくり」のポイントをまとめたものです。
多くの先生方に、活用していただければ幸いです。



岡山県総合教育センター

2009年3月



通常学級における特別支援教育

特別支援教育がスタートして2年が経ちました。書店に行くとあちらこちらに特別支援教育に関する書籍がたくさん並んでいます。発達障害のある子どもの特性に応じた支援についても多くの書籍が並んでいます。通常学級に在籍している支援を必要としている子どもたちが安心・安全に生活できる学級とはどのような学級でしょう。

今、学級経営や授業づくりのユニバーサルデザインを考えていくことが求められています。これを実現するためには、特別な教育的ニーズのある子にとって必要な支援が、個別の支援としてだけでなく、どの子にとっても便利な支援ととらえていくことが大切です。友達とのかかわりがうまくとりにくい子は、相手の気持ちを察したり自分の気持ちを表現したりできにくいと、苛立ちや不安から一見問題行動に見えるような言動をとることがあります。子どもの行動の背景にある要因を見つめ、気持ちに寄り添いながらよりよい言動を伝える支援をしていくことは、どの子にとってもお互いを理解し、支え合っていくために必要な支援と言えるでしょう。

子どもたちにとって、教室が安全で安心のできる居場所であり、「分かる・できる」を実感することのできる場所であることはとても大切なことです。そのためにも、特別な教育的ニーズのある子どもだけでなく、すべての子どもにとって一人一人が大切にされ、お互いが支え合う中で、落ち着いて暮らせる環境が整っていることや得意な学習スタイルや情報処理の仕方が異なる子ども一人一人にとって、分かりやすい授業が展開されていることが大切です。

この指導資料では、すべての子どもにとって安心・安全な暮らしや学びを提供するために、学級経営や授業づくりを行っていく上で必要な指導や支援のポイントをまとめました。

児童生徒一人一人が持てる力を発揮して主体的に学び、豊かに生活していくことができるための学級経営や授業づくりの際に、平成20年度に岡山県教育庁指導課特別支援教育室から出された「通常学級における特別支援教育」のリーフレットと合わせて、この指導資料をご活用いただければ幸いです。

Contents

通常学級における特別支援教育

第Ⅰ章 学級経営

- 1 すべての子どもを大切にした学級経営 ……2
 - (1) 行動の背景にある気持ちに寄り添い、支援に生かす ……2
 - (2) 学級経営や授業のユニバーサルデザイン ……2
 - (3) 教師のかかわりー子どもを深く理解し、支えることー ……2
- 2 安心できる、居心地のよい学級づくり ……3
 - (1) クラス目標ー分かりやすく提示するー ……3
 - (2) クラスルールー生活・組織のルールを明確にするー ……4
 - (3) どの子にも分かりやすい教室環境づくり ……5
 - (4) 所属感を育むこと
ー子どもの苦手なことも得意なことも支えるー ……6
- 3 一人一人の違いを認め、支え合う学級 ……7
 - (1) 一人一人の違いを認め、支え合うために
ー自己理解、社会性を育むー ……7
 - (2) 一人一人の学びを確かなものにするために ……12

第Ⅱ章 授業づくり

- 1 授業のユニバーサルデザイン ……14
 - (1) ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業 ……14
 - 2 どの子にも分かりやすい授業づくり ……15
 - (1) 多様な学習スタイルや認知特性を生かす ……15
 - 3 どの子にも分かりやすい学習環境の工夫 ……17
 - (1) 授業に見通しを持って取り組むための支援のポイント ……17
 - 4 「分かる」が実感できる場の工夫と支援 ……19
 - (1) 自分の力を発揮し、認められる場や活動の工夫 ……19
- 温かな学級の中で ……23
- 参考文献 ……24



第 I 章 学級経営



支援を必要としている子どもだけでなく、学級にいるすべての子どもたちが、安心、安全に生活し、居心地のよい、自分の居場所がある学級にしていくために私たちは学級経営で何を大切にしていっていいでしょう。

この章では、すべての子どもが自分の持てる力を発揮し、お互いに支え合える学級経営を行っていく上で必要な支援のポイントをまとめています。

「すべての子どもを大切にしたい学級経営」では子どもを深く理解することが適切な支援につながることを、「安心できる、居心地のよい学級づくり」では集団で生活する子どもたちにとって分かりやすく目的意識を持って生活していくために必要なポイントを、「一人一人の違いを認め、支え合う学級」では、スムーズな人間関係を結んでいくために必要な支援のポイントをエピソードを取り入れながら示しています。

なお、学級経営や生活に関する個別の支援のアイデアは平成 20 年に岡山県教育委員会から出された、校内支援データベースの中の領域「学級経営」「生活面」に多く載せられています。ぜひご覧ください。

<http://www.pref.okayama.jp/cgi-bin/tokubetu/kounaisien/index.cgi>





1 すべての子どもを大切にしたい学級経営

学習や休憩時間、机に伏している子を見ると気になりますね。また、授業が始まっているのにドアの外で壁を蹴っていたり掃除や給食準備の時間に役割を果たしていなかったりすると、つい、注意をしたくなります。こんなとき、注意の声かけをする前にちょっと一呼吸して、子どもの側に立ち、その行動の見方を変えてみるといろいろなことが見えてきます。

(1) 行動の背景にある気持ちに寄り添い、支援に生かす

先ほどの授業が始まっているのに壁を蹴っていたけんじくんの様子を見ていた先生は、こんな風にけんじくんのこころと行動を見立てました。

- | | | | |
|----------|---|---|--------------------------|
| A | 教室に入りたい。でも、チャイムが鳴ってしまったので入るタイミングを失ってしまいどうしたらいいかわからない。 | ➡ | 誰か誘いに来てくれないかなあ。ぼくに気付いてよ。 |
| B | 苦手な国語だし、今日はどんな勉強をするのか分からない。 | ➡ | 勉強したくないなあ。 |

日頃の様子から先生は仮にA、Bと見立てて、けんじくんが教室に入れるための支援を考えました。そこで、先生はまず、けんじくんに声をかけました。「けんじくん、漢字のフラッシュカードを出すのを手伝って」と。すると、けんじくんはさっきまで力の限り壁を蹴っていたのを忘れたかのように先生の側に行きました。先生が話す言葉と友達の答える声のテンポに合わせてカードを返します。20枚のフラッシュカードが終わるとカード入れにカードを片付けて席に着きました。先生はその後、黒板に今日学習する内容を所定の枠の中に書いていきました。……

この先生が行った支援はけんじくんにとっては失敗体験をしなくても済み、先生のお手伝いをする事で、学習に向けて気持ちを立て直すことのできるものとなりました。また、学習内容の見通しが持てるよう、視覚的に提示されたことで、少しでも安心して取りかかることができました。

(2) 学級経営や授業のユニバーサルデザイン

この先生は授業の中にもみんながスムーズに学習に取り組むための仕かけをしていました。授業構成をパターン化し、授業の始めは学習に向け気持ちを切り替えたり集中したりできるように、どの子にも分かりやすい内容を、カードを活用して一斉にテンポよく指導をしていたことです。

支援を考える際には、まず、どの子にも分かりやすい学級経営や授業のユニバーサルデザインを取り入れ、全体から個別の支援へという流れを大切にしたいものです。

(3) 教師のかかわり ー子どもを深く理解し、支えることー

支え合える学級づくりには、一見、無気力に見えたり、問題行動に見えたりする子どもの言動の背景にある要因を多面的に考えてみること（ルールが理解できていない、相手の立場や気持ちを考えることが苦手、一緒に遊びたいなどの気持ちをうまく表現できない）が大切です。また、支援を必要としている子だけでなく、どの子も「困っていることが教師や友達に伝えられる」といった安心感が持てるようにしたり「一緒に考えていこう」といった学級の雰囲気を作ったりすることが大切です。

私たち教師が、子どものありのままの姿を肯定的に受け止め、気持ちに寄り添い、自分を見つめられる機会を作り、自己理解や他者理解ができるようなかかわりをする事が、子どもたちの自己肯定感や社会性の育成を図り、持てる力を発揮して主体的に活動できることにつながります。



2 安心できる、居心地のよい学級づくり

個性豊かな子どもたちが心地よく一緒に生活したり学習したりするためには、一人一人の子どもに自分の「心の居場所」があり、お互いに認められている安心感があることが大切です。

そのために教師は、一人一人の子どもが目的意識を持てるよう、学級の目標やルールを分かりやすく示したり、一人一人が活躍できる機会をつくったりするとともに、教師と子ども、子ども同士の人間関係を促進する手だてを積極的に考え、日頃のかかわりの中で子どもにできるだけ多くの肯定的メッセージや励ましの言葉をかけていくことが大切です。

ここでは、「安心できる、居心地のよい学級づくり」のために大切な四つのポイントを示します。

(1) クラス目標 一分かりやすく提示するー

研究会やサポートキャラバンで学校を訪問した際に一番に目がいくのは黒板の上のクラス目標です。クラス目標にはその学級の先生の願いや意志が表れています。

ある学級を訪ねたとき、こんなクラス目標が掲げられていました。担任の先生にお話を聞くと、クラス目標を子どもたちに分かりやすくするために、道徳で取り上げた「ふわふわことば」の中で、子どもたちがみんな仲良くするために「使いたいことば」として選んだ言葉を掲示しているとのことでした。そして、その言葉は教室の横の掲示板にもはってあり、そこにはたくさんの花丸シールがついていました。

先生は、自分の気持ちを言葉でうまく表現できない子に「何て言ったらいいかな」と問い、答えられないときには、「ありがとうだったかな」とモデルを示し促すことで、スキルを少しずつ身に付けることができてきたことやそれを見ていた周りの子が先生の真似をして友達同士で支え合っていることを教えてくれました。また、先生は、支援を必要としている子だけでなく、その子を取り巻く子どもたちに対しても「上手に声をかけてくれてありがとう」とメッセージを送っていることも話してくれました。



① 達成感を実感できるための指導・支援

道徳の時間に友達がしてくれることをありがとうのカードに書く、物の受け渡しの際にありがとうと言うなど、日々の生活の中で、クラス目標を具体的に示し、子どもたちのがんばりを分かる形にして誉めることで、子どもたちは、クラス目標への達成度を実感できます。また、支援を必要としている子どもだけでなく、どの子どもにも「いつもがんばりをみているよ」というメッセージを送ることで、子どもたち一人一人が「認められている」「大切にされている」と感じることができます。

掲示したクラス目標に対する具体的な目標が達成できたら、新たな具体的な目標を子どもたちと一緒に考え、掲示していくとよいでしょう。学級の子ども一人一人が、自分のどのような行動やかかわりがクラス目標を達成することになるのかが分かる指導と支援が大切です。

(2) クラスルール ー生活・組織のルールを明確にするー

支援を必要としている子どもにとって、「何をしたらよいか分からない」環境は、居心地が悪く不安であり、生活を困難にさせることが考えられます。すべての子どもたちにとって学級のルールは安心して暮らすために必要です。

① ルールは見える形で明確に示す

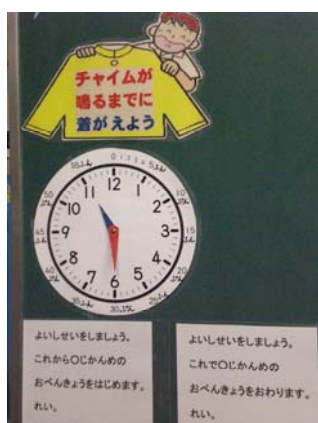
ルールの提示に当たっては、必要な情報が消えていく言葉だと、聞いて理解するのが苦手な子どもにとっては守ることが困難になります。そこで、毎日繰り返される係活動や清掃、当番活動、学習の準備などでは「何のために、何をどこまで、どのようにすればよいか」の目的と方法、始まりや終わりの時間など、集団生活でのルールを文字や絵で明確にしておくことがポイントです。

例えば清掃では、清掃場所、分担、範囲、道具、手順、終了及び後片付けの確認方法などを、絵や文字、写真などで提示しておきます。この支援はどの子どもにとっても分かりやすく、目的を意識し主体的に活動することができます。また、支援が必要な子どもが困っている際にも、視覚的支援があると、どこまで理解していて、何に困っているかを把握することもできます。

② ルールを守ろうとする意識を育てる

ルールは学級の子どもたちが心地よく過ごすために必要なものです。しかし、守ることを強く意識すると、できない子どもは集団から外れた子として捉えられがちです。例えば、チャイムがなくてもまだ廊下にいる子に対して、教室に入れるよう学級の子どもたちがカウントダウンをして席につくこと促し、「みんなが待っているよ」というメッセージを送るなどの工夫も大切です。そしてルールを守ろうとしている姿を認めることで、集団の一員であることとルールの大切さを意識できるようにしていきます。こうした支援は低学年のうちから行い、定着を図りましょう。

③ あると便利！教室で見付けたルールの視覚的支援



業間の準備を絵と文字で



帰る前のセルフチェック



学習前の準備を見える写真で提示



声の大きさを絵で提示

(3) どの子にも分かりやすい教室環境づくり

教室は子どもたちが日々生活し、学習する場所です。給食や清掃、係活動など視覚的に提示しておく必要のあるものがたくさんあります。しかし、学習の際には、黒板のある教室前面にいろいろなものがはってあったり物が置いてあったりすると、視覚的な刺激が入りやすい子どもにとっては、どこに注目したらよいか分かりにくく、集中して学習することができにくくなりがちです。そこで、誰もが安心でき、落ち着いて暮らせるために分かりやすく、整然とした教室となるような工夫をしましょう。ここでは学校で見付けた教室環境の工夫をチェックリストにしてみました。

どの子にも分かりやすい教室環境チェックリスト (小学校低学年)

・ 教室前面の黒板の上の壁面には、必要なものだけ掲示している。	<input type="checkbox"/>
・ 黒板の両サイドの壁面には、時間割など年間を通して必要なものだけ掲示している。	<input type="checkbox"/>
・ 教室前面には、提出物のかごなど、必要なものを整然と配置している。	<input type="checkbox"/>
・ 時間割は文字と絵、教科別の色分けなどの工夫をし、分かりやすい配慮をしている。	<input type="checkbox"/>
・ 校外学習や学習発表会などのスケジュールや学習内容を掲示する場所が決めている。	<input type="checkbox"/>
・ 給食、掃除などの当番は、手順や内容、担当者が分かるよう顔写真などで示している。	<input type="checkbox"/>
・ 掃除用具入れには、用具の数や置き場所を文字や絵、数字などで示し、片付け方が分かるように配慮している。	<input type="checkbox"/>
・ 掃除の手順支援として、床や壁面に「何をどこまでするか」をマークや文字で表示している。(掃除箇所の範囲、始まりと終わりなど)	<input type="checkbox"/>
・ ゴミ箱は、分別の種類を絵や文字で表示している。	<input type="checkbox"/>
・ 個人ロッカーは、整理の仕方を絵で示して確認できるようにしている。	<input type="checkbox"/>
・ 机の中に片付ける物の配置などを絵や写真で示している。	<input type="checkbox"/>
・ 支援が必要な子には、机の位置を示すマークが床にテープなどで示している。	<input type="checkbox"/>
・ 一日のスケジュールは確認しやすいよう、教室の前面の黒板や定位置に配置した補助黒板に、必要に応じて写真や絵で教科や場所を示している。	<input type="checkbox"/>
・ 教室後方の壁面は活用の仕方が決めてあり、作品は整然と掲示してある。	<input type="checkbox"/>
・ 必要に応じて、クールダウンエリアを設置するなど、落ち着ける場がある。	<input type="checkbox"/>
・ 座席の配置は、支援が必要な子の状態を配慮して安心できる位置にしている。	<input type="checkbox"/>
・ ※特別教室には、その部屋の活用イメージをイラストや文字で示してある。	<input type="checkbox"/>
・ ※廊下の歩き方やドアの開閉の仕方が文字やマークで示してある。	<input type="checkbox"/>

視覚的な支援は定着状況に応じて変えていきましょう。表中の※印の工夫は、学校全体で検討しておくことが大切です。

① 学校で見付けた環境整備の工夫あれこれ



置き場所を明確に示す



一時間のスケジュール



ゴミはここに集めて



机はここにそろえて

(4) 所属感を育むこと —子どもの苦手なことも得意なことも支える—

掃除の時間。けんたくんはまだ廊下で遊んでいます。友達からたびたび注意を受けるのですが、一向に取りかかりません。そして最後には運動場に出て行ってしまいました。

子どもたちから報告を受けた先生は「なぜ、けんたくんは掃除をしないのか」について、けんたくんの行動の背景にある要因と気持ちを見立ててみました。

担当する掃除場所の手順や範囲が理解できず、掃除ができないこと（失敗体験）に対して注意が繰り返される。取りかかって最後までできないため意欲的に取り組むことができない（やる気の低下）。だから、始めから取り組まない（努力の拒否）というマイナスの循環になっていると考えました。

けんたくんの気持ちを考えると、遊びたくて運動場に出たのではなくその場に居ることが苦しくてしかたなく出て行ったのかもしれない。こうした状態が続くとけんたくんは自己肯定感が下がり、教室にも居づらくなってしまおうでしょう。

担任の先生は掃除時間の始まりに、掃除の場所と手順を書いた手順表を提示し、掃除の範囲を示した廊下のテープを指さして、2回どおり往復してふいたら終わりにしてよいことを伝えました。先生は、このことを他の子どもたちにも伝えることで、みんなで掃除の仕方や範囲を確認しました。

そして、けんたくんには、掃除ができたかどうかだけではなく、自分はどこまでがんばれたか、何ができにくかったのかを聞く中で、できてきている過程をしっかりと誉めました。



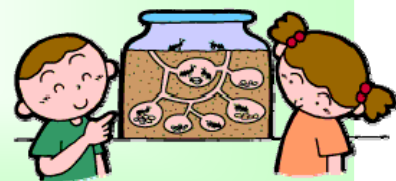
① 苦手を支える —努力している過程を認める—

苦手なことも、教師は、その子どもに分かる支援をし、努力している過程を認め、「最後までできるようになってきたね。おかげで、廊下がびかびかになって気持ちいいね。ありがとう」などの声かけを繰り返し行うことが大切です。こうした支援を行うことで、子どもは、自分の役割を意識し、人に認められる経験を積み重ねる中で、「努力すれば自分もできる」「人の役に立っている」といった自己効力感や自己有用感を持つことができるようになります。

② 活躍できる機会をつくる

掃除が苦手なけんたくん。でも、得意なこともたくさんあります。誰よりも虫の名前をよく知っています。そんなけんたくんのことを先生はよく見ていて、休憩時間に虫を見付けると、一番にけんたくんに尋ねます。けんたくんはカードに虫の絵と名前をかいいて教室の後ろの自由帳コーナーにはります。そして、帰りの会で、今日見付けた虫の名前や色、特徴を発表します。友達も見付けた虫の名前が分からないときは、けんたくんに聞きにやってきます……。

音楽の始まりを意識するために取り入れられたリトミックでリズムに合わせて号令をかけているのは、なつみさんです。ちょっとじっとしているのが苦手なゆうきくんやまさとくんは、先生の「配り係の人よろしく」の声かけで元気よく先生の元に駆け寄ります。ゆうきくんやまさとくんの「どうぞ」の声かけに、友達は「ありがとう」と返します。二人ともぱっと笑顔になりました。



誰もみんな苦手なことや得意なことがあります。支援を必要としている子も同じです。私たち教師は子どもの得意なことや好きなことを把握し、生活や学習で活躍できる場を作ることが大切です。

活動の場を設定する際には、どの子どもも活躍できるようにすること、子ども同士のかかわりやつながり、活動の広がりがつくれるようにすることに配慮します。(あいさつの係、プリントの配り係、説明係、動物の飼育係など)。こうした環境の中で、認められる経験を重ねることが、子どもたちの自己肯定感と学級への所属感を育てていきます。



3 一人一人の違いを認め、支え合う学級

支援を必要としている子どもだけでなくどの子ども大切にされている、がんばりを見つめてくれると感じられるような声かけや具体的な支援をしていくことが、子どもと教師との関係性をつなぎ、子どものやる気と自信を育むことについては前に少し触れました。その関係性を基盤に、ここでは、子どもが、一人一人の違いを認め、支え合うために大切な支援や指導について、エピソードや指導例から考えていきます。

(1) 一人一人の違いを認め、支え合うために ー自己理解、社会性を育むー

個性豊かな子どもたちが、学級で自分らしく、意欲を持って生活していくために、私たち教師は、一人一人の子どもが自分や友達のよさや苦手なことを知り、お互いがスムーズにかかわり合えるようになるための支援や指導を行うことが必要です。

ブランコに乗りたかったつとむくん

ブランコで遊ぼうと運動場に出たつとむくんは、ブランコに乗っていたゆりさんをいきなりたたいてしまいました。それを見ていた友達が報告しに先生のところへ走ってきました。つとむくんは待つことや自分の気持ちを相手に伝えることが苦手でした……。

先生は、「ブランコに乗りたかったのね」とつとむくんの気持ちを言葉にして返しました。たたかれたゆりさんには「痛かったね、大丈夫？」と声をかけ、たたかれたところをなでたり肩をぎゅっと抱きしめたりして、つらかった気持ちを受け止めました。そして、その後、友達に「つとむくんは、後どれくらい待てばいいのかわからなかったのかな。どうしたらいいかな」とつとむくんのとった行動を意味付けた後、自分の気持ちをうまく伝えられる方法について、友達に投げかけました。友達は「かわってと言う」「後 10 数えたら終わりと言う」「ごめんねと言う」などのアイデアを提案しました。その後、先生は、つとむくんにも分かりやすいよう、みんなで使うスキルとして「かわって」「ごめんね」の言葉をカードに書いて教室にはりました。



① 感情の理解と調整のための支援

この先生のように、子どもの言動を（伝えたい気持ちに寄り添って伝えられないことを）言語化したり、意味付けたりすることは、子どもが自分の感情や行動を理解していく上でとても大切な支援となります。合わせて、周囲の子どもの感情にも寄り添い、受け止めることも大切な配慮です。また、課題解決に向けて、よりよい行動につながる具体的なスキルをみんなで検討すること、そして、その方法をその子の認知特性に応じた方法（絵やソーシャルストーリーなど）で教え、みんなで共有することも重要です。こうした支援は、この子をみんなで理解し、支援する具体的な手だてとなります。この先生は小さなカードにこの言葉を書いてポケットに入れ、必要なときに使っていたそうです。それを見ていた子どもたちはブランコの順番を待っているとき、「かわって」と運動場の土に書いたりみんなで10数えたりして、つとむくんを支えてくれたそうです。

教師がモデルを示し、そのモデルをその子も周囲の子もモデリング（真似）をすることで、子ども同士のスムーズな関係が築かれていくような支援を継続的に行っていくことが大切です。こうした環境の中で、支援を必要としている子どもは、成功体験を重ね、スキルを身に付けることができます。

② 自己理解を促し、自分らしさを肯定的に受けとめるための支援

子どもたちは、日々の遊びや学習の中で、友達とかかわり合って生活しています。そして、相手が表す言動や表情から、自分の感情や行動、言葉が相手にどのように伝わっているかを理解していきます。支援を必要としている子は、自分の感情を言葉や動作で伝えにくかったり、相手の気持ちを表情や言葉から察したり理解したりできにくいといった様子が見られます。

支援を必要としている子が小学校の高学年から中学校の時期になってくると、自分を客観視し、自分自身の困難さや他者との違いに気付く時期になります。そして、できないこと、友達と違うことに対して自分を否定的にとらえ、自己肯定感が下がることがあります。また、周囲の人に映る自分と自分がイメージしている自分とのズレから、自分を高く評価する場合もあり、周囲とのトラブルが起こりがちです。だからこそ、教師は、低学年のうちから、すべての子どもが自分の感情を理解したり、自分の行動の意味を確認したりできるような声かけや具体的な支援を行うことで、子どもが自分らしさに気付き、肯定的に受け止められるようにしていくことが大切です。

ここでは、実践の中で見られた「自己理解や自分らしさを知り、肯定的に受け止める」ための支援のポイントを示します。

自己の感情や自分らしさの理解のために

○ 自分の感情にぴったりの言葉を伝える

- ・「一緒に遊びたかったんだね」と、言葉にできない本人の感情にフィットした感情を言語化して伝える。「『仲間に入れて』と言うと伝わるね」とよりよい言葉を具体的に示す。
- ・同じような状況でうまく自分の気持ちを表現できないとき「何て言ったらいいかな」と問い「仲間に入れて」とモデルやその一部を示す。

○ 子どもの行動を意味付ける、価値付ける

- ・「蹴ったのは、どれくらい待たばいいか分からなかったんだね」「残り5分を見て我慢できたんだね。がんばったね」

○ 自分らしさに気付く声かけ リフレーミング

- ・「私は引っ込み思案なんです」という語りについて、リフレームしながら「とても慎重なところがあるんだね」と伝える。短所をとらえるのではなく、自分の傾向として理解できる声かけを行うことで自分らしさとして受け止められるようにする。

○ 行動を調整しようとする気持ちを促す

- ・「まだ、教科書を開いていないの？早く開きなさい」→「教科書の21ページだよ。ほとんどの人が開いているね。素晴らしいね」個別の注意ではなく、モデルとなる子どもを誉めることで、準備のできていない子どもの気付きを促す。
- ・「廊下を走ってはいけません。ぶつかっただけが・・・」→「廊下は歩きましょう」長々とした禁止や注意ではなく、期待している行動を短い言葉で具体的に示す。

○ 自尊感情を育む

- ・わたしメッセージ「〇〇してくれたのね。安心したよ」「上手に声をかけてくれたのね。ありがとう」を送り、寄り添っていてくれる安心感が持てるようにする。
- ・プラスメッセージ「できた」「できない」の結果だけでなく「〇〇まではできているね」と経過や達成度を示すことで、自分のがんばりを認められるような声かけをする。
- ・「きみならきっとここまでできると思うよ」と目標を示すことで自己効力感を育てる。

日頃のかかわりの中で、子どもたちにできるだけ多くの肯定的メッセージや励ましの言葉をかけていくことが大切です。

I am OK !

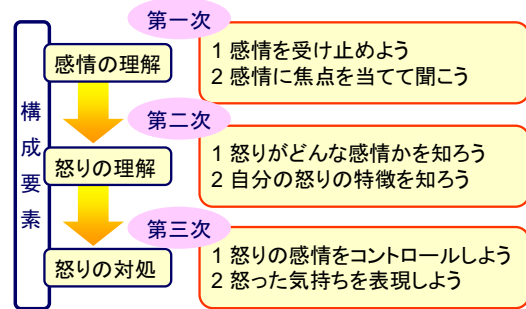
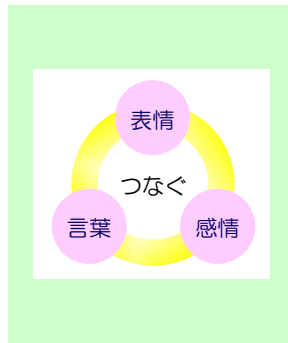


③ 予防的な取り組みとしての指導

日頃の生活や授業の中で、意識的に自分や友達を理解していくことができるような支援と合わせて、子どもたちみんなで一斉に自己理解や適切な友達とのかかわり方について学び、確認できる機会も大切にしたいものです。ここでは、アンガーマネジメント教育の指導の展開例「感情の理解と感情のコントロール」について紹介します（※取り上げている指導の対象学年は展開例によって異なります）。

授業は、右図に示すように、「感情の理解」「怒りの理解」「怒りの対処」の三つから構成されています。

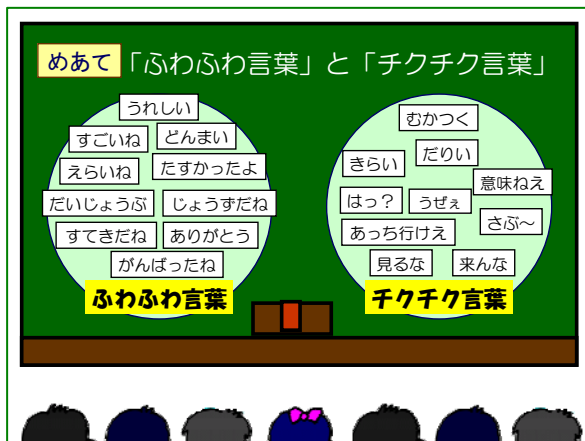
主な教師の発問や教材は、黒板の中に示しています。「表情」と「言葉」と「感情」をつなぐために、具体的な場面を想定し、ロールプレイングやワークシートを活用し、動作、表情、言葉で感情を表現できるようにします。



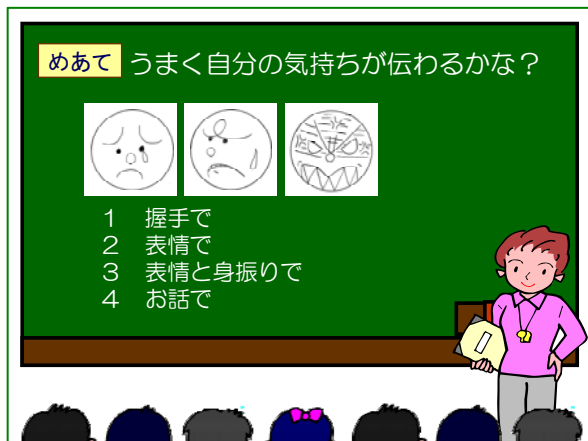
授業の構成要素と指導の流れ

第一次は「感情の理解」です。

「うまく自分の気持ちが伝わるかな？」では、表情カードを活用しています。教師の表情や表情カードの特徴から推測した感情を言語化することで、見えない感情について気づき、明確化していきます。



第一次の1／感情を受け止めよう

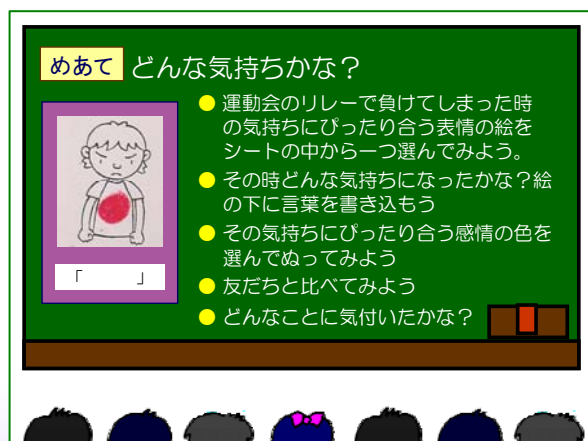


第一次の2／感情に焦点を当てて聞こう

第二次は、「怒りの理解」です。

「どんな気持ちかな？」では、具体的な場面を取り上げ、その時の気持ちと表情をつなぐために様々な表情の絵カードを準備しておきます。

また、選んだ絵カードに、その時の気持ちを色や言葉で表す活動を行います。友達と比べることによって、同じ出来事に対して、一人一人の感じ方には違いがあることを理解できるようにしていきます。



第二次の1／怒りがどんな感情かを知ろう

怒りは誰にでもある感情です。「自分の怒りのとくちょうを知ろう」では、怒りの度合いを温度計で示したり、ワークシートの表情カードを選択したりすることで、視覚的に自分や友達の怒りの度合いを理解できるようにします。併せて、怒りを感じたときの体の変化（ドキドキする、体が熱くなる等）についても考えさせることで、怒りに対する特徴をつかみやすくします。

めあて 自分の怒りのとくちょうを知ろう

怒りの温度計

- 部屋で音楽を聴いていたら、家族から「うるさい!」と怒鳴られました
- その時どの程度怒りを感じますか?
- 自分の怒りの感情にぴったり合う温度を選んでみよう
- 友だちと比べてみよう
- どんなことに気付いたかな?

第二次の2 / 自分の怒りの特徴を知ろう

ぼくのわたしの
おこりんぼ虫は?

あなたのおこりんぼ虫は、どれくらい?
(○をつけましょう。)

	平気	残念	不満	イライラ	怒る	爆発
できごと						
(例) 帰りに、友だちのかさが自分の顔に当たった。			○			
① ろうかで、ふざけていた人がぶつかってきて、何も言わずに走っていった。						
② 給食で、自分だけ牛乳が配られていなかった。						
③ 自分の悪口を書いた落書						

怒りについてのワークシート

第三次は、「怒りの対処」です。

「怒りの感情をコントロールしよう」では、怒りの感情に名前を付けることで、外在化し、自分の怒りをコントロールできるようにします。

①「怒った気持ちの表現」では、怒りに名前を付けたり絵に表したりする活動を取り入れます。この活動は、どんな時に怒りが沸き起こってくるのかを意識することで、具体的場面をイメージしながら対処できるようにすることねらっています。

めあて 自分の怒りの感情と上手につき合おう

- 自分の気持ちを落ち着かせる
カウントアップ法、自己呼びかけ法
イメージ呼吸法
- 怒りの感情に冷静に対処する
リフレーミング

第三次の1 / 怒りの感情をコントロールしよう

②「怒りの感情と付き合う方法」

めあて 自分の心の中をそっとのぞいてみよう

すぐカッとなるころ → ゴン太

- ①自分の中でちょっとこんなところいやだなあって思うことある?
- ②どんな時にそんな気持ちになるの?
- ③その気持ちに名前をつけて、絵も描いてみよう
- ④今まで、どんなふうにしたらその〇〇ちゃんは落ち着いた?
- ⑤あなたの〇〇ちゃんに手紙を書こう

第三次の1 / 怒りの感情をコントロールしよう

①「怒った気持ちの表現」

次に、②「怒りの感情と付き合う方法」では、命名した怒りが小さくなるよう、コントロールをする具体的方法について知り、活用できるようにします。授業展開では、怒りの大きさを信号に例えたり、現実に近い場面でリハーサルをしたりして、自分に合ったスキルを見つけて活用できるようにして行くことが大切です。

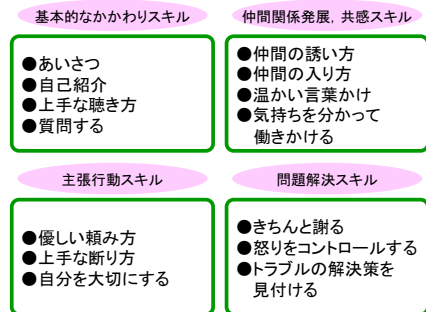
※アンガーマネジメント教育の基本的な考え方や具体的な指導方法に関する書籍は多く出されています。また、当総合教育センターでも生徒指導部が実施している研修講座の中でも取り上げていますので、ご活用ください。

④ 社会性を育む 円滑な対人関係を育むために

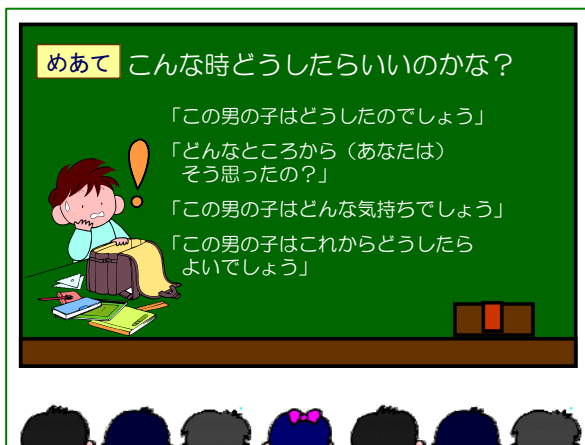
日々のトラブルで「もう少し、相手に対して自分の気持ちを適切に伝えられるといいのに・・・」と感じている先生は多いのではないのでしょうか。

私たちは日々の生活の中でたくさんのスキルを活用して対人関係をスムーズに運んでいます。こうしたスキルは社会の中で育まれていくものですが、子どもたちを取り囲んでいる社会の人間関係が希薄になっていると言われている現代では、学校で、スムーズな対人関係を築いていくための知識や具体的なスキルを教えることが必要です。これを実現する方法の一つとして、良好な人間関係をつくり、保つための知識と具体的な技術やコツを教える、ソーシャルスキル教育があります。相川氏が提唱している学校で扱いたいソーシャルスキルは、右の図に示す四つです。授業を構成する際には、学級のアセスメントを行動観察やソーシャルスキル尺度を活用して行い、取り上げるスキルを決定します。

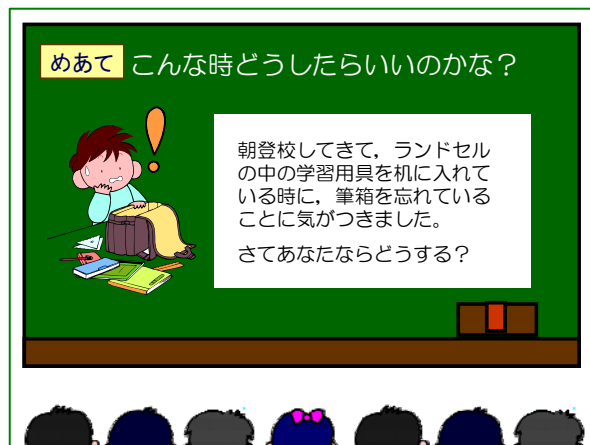
では、指導展開例を一つ紹介しましょう。取り上げたスキルは「やさしい頼み方」です。



学校で扱いたいソーシャルスキル

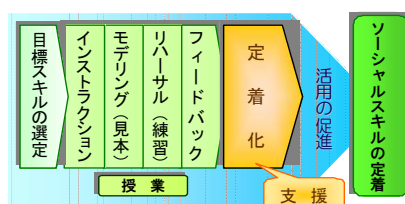


インストラクション(教示)



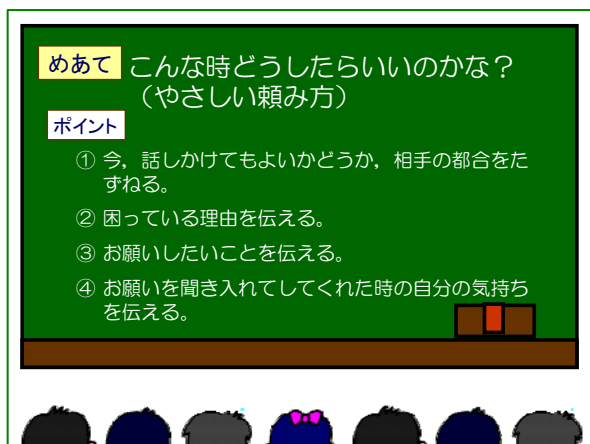
モデリング(手本)

授業の進め方は、下図のような流れで行います。



教示では、日常生活でありがちな事柄を取り上げ、自分と相手の気持ちに着目できるようにしながら、ターゲットにしたスキルを習得すると、どんな良いことがあるかについて伝えていきます。

見本では、ロールプレイやビデオ、紙芝居などを活用し、適切なモデルと不適切なモデルの比較ができやすいよう、声の大きさ、視線や体の向き、表情に着目できるようにします。またリハーサルでは、時間をかけて頼む役と頼まれる役の両方を体験できるようにします。フィードバックでは、練習したスキルを誉めたり、よりよい表現になるようプラスの言い方で指導したりします。



リハーサル(練習)

(2) 一人一人の学びを確かなものにするために

① 集団の中で育む

対人関係やコミュニケーションに困難さのある子どもに対しては、個別に指導の時間をとって、その子どもの得意とする方法（絵や文字カード、ソーシャルストーリーなど）を活用して、スキルを身に付けることができるようにしていくことが必要です。支援を必要としている子どもだけでなく、どの子どもも、学んだスキルの定着を図るためには、日常生活や学習の場面など、集団の中で継続的に取り組んでいくことが大切です。



② 保護者とともに

一人一人の子どもを理解する上で保護者との連携は欠かせません。特に、支援を必要としている子どもの場合には、困難なところも得意なところも含めて受け止め、寄り添いながら、保護者と長期、短期の目標を確認していくことが重要です。その上で、今の課題を明確にし、支援について共通理解を図りながら、できてきている経過やできていることをしっかり誉め、家庭と学校で共に子どもを支え合っていくことが大切です。

③ 教師のかかわり方 ー教師が自分自身を知ることー

どの子どもにも苦手や得意はあります。一人一人の違いを認めた上で、できることをお互いに確認し、全体の活動の一部として位置付け、役割や方法をみんなで確認し、できていくことをお互いに支え合うことができるような集団づくりをしていきましょう。

そのためにも、教師は子ども同士がかかわっている様子を観察し、うまくかかわっている場面をとらえて、できている過程やできたことが分かる方法（短い言葉、表情、動作）や形でしっかり誉めていきましょう。子どもたちの困難さやがんばりをキャッチするアンテナの感度や場に応じて誉める姿勢と技術がポイントです。

子どもが誉められたと感じる受け止め方はいろいろです。教師自身が自分を理解し、子どもの感情と向きあうときにはチューニング合わせができるよう、エゴグラムを活用し、自分自身のかかわり方の特徴を把握したり、プラスの表現ができるようリフレーミングしたり、非言語の豊かな表現ができたりするようになっておくことが重要です。



そのために、日頃の子どものかかわり方について見直してみましょう。自分の声かけの仕方や表情、視線、態度などは意外と自分では気付かないものです。授業が始まる少し前からビデオを回しておき、授業での全体指導や机間指導の際に自分がどのようなかかわり方をしているのかをモニタリングし、逐語録をとり、自分のかかわり方の傾向を知ることが大切です。

※保護者支援や支援を必要としている子どもの理解等については、当総合教育センター、特別支援教育部が実施している研修講座をご活用ください。また、ソーシャルスキル指導、自己理解や保護者支援については、平成19年度、平成20年度の研究紀要に掲載しています。ぜひ一読いただき、参考にさせていただければ幸いです。

第Ⅱ章 授業づくり



得意な学習スタイルや情報処理の仕方が異なる子どもたちが、「分かる」「できる」を実感できるような授業を行っていくために私たちは授業づくりで何を大切にしていっていいでしょう。

この章では、すべての子どもが自分の持てる力を発揮し、認められ、「分かる」「できる」ことを実感できる授業づくりで大切にしたい指導や支援のポイントをまとめています。

「授業のユニバーサルデザイン」では、支援を必要としている子どもを含め、多くの子どもたちにとって分かりやすい授業を考える際のポイントを、「どの子にも分かりやすい授業づくり」では多様な学習スタイルや認知特性を生かした活動を組み込むことや学習過程を明確にする工夫が大切であることを、「どの子にも分かりやすい学習環境の工夫」では授業に見通しを持って取り組んだり、学習内容を理解したりできるための工夫を、「『分かる』が実感できる場の工夫と支援」では、学習活動の流れの中に、一人一人が認められる場の設定や全体の中で行う個別の支援の工夫が大切であることを具体例を取り入れながら示しています。

なお、授業づくりについては、平成20年度の研究紀要に掲載しています。ぜひご一読いただき、参考にいただければ幸いです。

また、授業づくりに関する個別の支援のアイデアは平成20年に岡山県教育委員会から出された、校内支援データベースの中の領域「学習面」に多く載せられています。ぜひご覧ください。

<http://www.pref.okayama.jp/cgi-bin/tokubetu/kounaisien/index.cgi>





1 授業のユニバーサルデザイン

(1) ユニバーサルデザインの考えを取り入れた授業

先生の話を中心して聞くことができにくい、黒板の文字を写すのに時間がかかるなど支援を必要としている子どもたちが在籍する学級で、一人一人のニーズに応じた授業を展開していくためには、どのようにすればよいのでしょうか。ここでは、支援を必要としている子どもたちをはじめ、多様な子どものニーズに応じた授業を展開するという「授業のユニバーサルデザイン」について考えます。

① 三つのポイント

授業のユニバーサルデザインを考えていく際のポイントとして、次のようなことがあります。

- 興味や関心、学力などが異なる多様な子どもたちのニーズに応えるためには、必要な配慮や工夫はどのようなものが必要であり、それをどのように取り入れればよいのかを検討すること。
- 支援が必要な子どもたちのニーズに対応した工夫や配慮は、できるだけ目立たない形で授業の中に溶け込んでいること。
- 多くの子どもたちにとって分かりやすい授業の進め方を工夫した上で、なおニーズに応えられない場合に、個別のニーズに応じた配慮や支援を行うこと。

ユニバーサルデザインを取り入れた授業では、支援を必要としている子どもへの配慮から学んだ支援を授業の中に生かし、多様なニーズに応じていくことが大切です。そして、その上で個別のニーズに対していくつかの追加の選択肢を用意していきます。

見通しを持って取り組む支援

- ・ 授業の流れを決まった形にする
- ・ 学習予定を示す

教師の話子どもに伝える支援

- ・ 言葉を分かりやすくする
- ・ 絵、写真、文字を用いる

課題の遂行を助けるための支援

- ・ 目標を明確にする
- ・ 目標以外の部分の負担を軽減する

原則的な支援

気分を立て直して戻ってくるよ」と、その子について肯定的な説明をすること。そして、肯定的な見方をしている子どもを誉め、協力し合える学級であることを子どもたちとともに認め合うことで、周囲の子どもたちが「こんな時は、こうしたらどう？」と発見をしてくれるようになり、多様な個性を認めあえる集団が形成されていきます。

学習する教科の特性や子どもたちの実態を考えると、授業のユニバーサルデザインは、決まった形ややり方があるわけではありませんが、ここでは、どの子にも分かりやすい授業づくりのための原則的な支援についてまとめました。

授業づくりでは、支援の必要な子どもに対して、「本人の努力ではカバーできないことがある」という視点に立ち、子どもの認知の実態を理解した上で課題を達成する方法を探っていくことが求められます。

② 温かな雰囲気の中で学びを深める

「支援は、特別な人だけに特別にするものではない」というメッセージを子どもたちに伝えていくことが大切です。「お隣の部屋に行ったけれど、





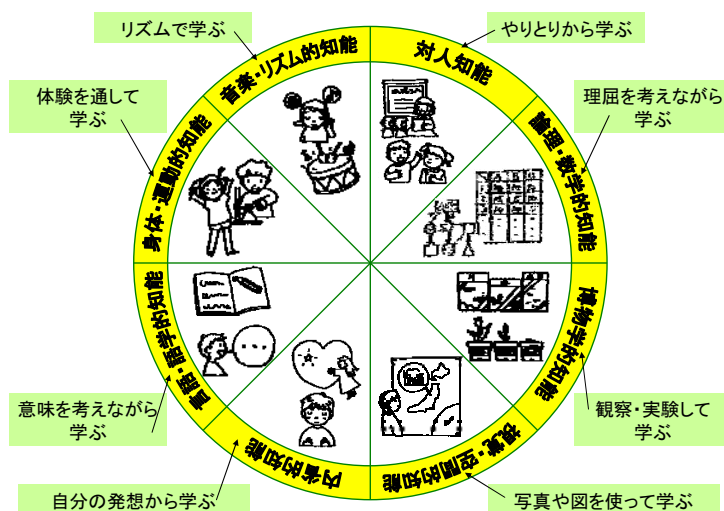
2 どの子にも分かりやすい授業づくり

「子どもの得意なこと、苦手なことは何」と聞かれて何を思い浮かべるでしょう？体育、音楽、算数など教科学習で頑張っている様子が浮かんでくるでしょうか。ある研修講座で講師の方がこんな質問をされました。「パソコンの操作が分からなかったとき、あなたはどうしますか？」答えは三択です（①人に聞く ②マニュアル本を読む ③とにかく操作してみる）。①と答えた方が多かったのですが、他の答えの方もいました。「いろんなやり方の人がいるんだな」と改めて感じた瞬間でした。人が何かを考えたり、覚えたりするときには、いろいろな情報を取り込み、処理をしていきます。人によって、得意な学習スタイルや情報処理の仕方があるということを授業づくりの中でも大切な視点として考えていくことが大切です。

（1）多様な学習スタイルや認知特性を生かす

子どもたちが楽しそうに学習している場面は子どもによって異なります。調べ学習では、一番に図書室に行き、本を熱心に読んでいる子、普段は落ち着きがないけれど、観察になると集中して見ている子、「なぜ？」の疑問に理論的に答える子。このような子どもの姿が見られるのは、子どもの認知特性と学習内容が合っており、脳が活性化されているからだと考えられます。

右の図はHoward・Gardnerによって開発されたマルチプルインテリジェンスモデルです。このモデルでは脳の働きを八つの知能として説明しています。人によって優位に働いている知能はそれぞれ違うと言われています。これらをバランスよく発達させるような学習方法を授業の中で展開していくことも、子どもにとって「分かる」授業づくりとなるのでは



MI ホイール(八つの知能)

引用・参考: 本田恵子著 2006 脳科学を生かした授業をつくる みくに出版

はないでしょうか。他の方向から子どもの学び方を見てみると、物事を順番に聞いて理解したり考えたりするのが得意な子どももいます。また、視覚的な手がかりをもとに全体から部分を考えていくのが得意な子どももいます。クラスの中にはいろいろな学び方をしている子どもがいるということを意識することが大切です。授業づくりの際には、一人一人の学び方の違いを考慮し、苦手なことをしっかり理解した上で、得意な学び方が生かせるよう、授業構成や学習方法、教材教具の工夫をしましょう。そして、一時間の授業の中に必ず全員参加できる場面をつくるよう配慮しましょう。



①「分かる」授業を組み立てる ―授業展開の見通しを明確にする―

教科の特性によって、取り入れる学習方法は異なることと思います。しかし、毎回授業の流れが変わると、子どもたちは集中できなくなり、授業に主体的にかかわっていくことができにくくなります。そこで、授業の流れを一定程度決まった形にしておくといよいでしょう。こうすることで、子どもも教師も学習内容や活動についての見通しを持ちやすくなります。国語の授業を例に挙げると、「一番に漢字ドリルをする、二番に教科書について学習する、三番にグループで音読をする、四番に練習問題をする、授業は終わり」というように、授業をいくつかの短い学習内容から構成します。

授業の流れを組み立てる際のポイントとしては、「一つ一つの課題は、子どもの集中が続く時間を目安にする」「見る、聞く、話す、書く、操作するといった変化のある活動にする」といった点が挙げられます。始めのうちは、見通しが持ちやすいよう、ボードなどを利用し、「学習の予定」が確認できるようにしておくといよいでしょう。授業展開の見通しを明確にするという点では、一時間の授業だけでなく、長期に渡る学習の予定も見える形で示しておくとい見通しを持つことができます。運動会や学習発表会などの学習では、行事カレンダーを作り、学習内容を文字や絵で示しておくことで、日々の学習が全体のどの段階の取り組みか、今後の学習は何があるのかを理解できやすくなります。

授業に集中して取り組むためには、導入のときに絵や図を提示して興味、関心を持たせるという方法もあります。ここでは、授業時間のチャイムが鳴って、遅れて教室に入ってきた子どもも、学習にスムーズに取りかかることができる方法について示します。チャイムと同時にフラッシュカードを活用して、テンポよく既習漢字の読みをしたり、読むページを提示しておき、一斉に微音読をしたりする方法です。こうすることで、学習に対する構えができ、落ち着いた雰囲気の中で学習をスタートさせることができます。

②「分かる」授業を支える環境や教師のかかわり方

分かる授業をつくっていくためには、授業構成だけでなく、教師の指示や発問が分かりやすいものであることが大切です。詳しくは「4『分かる』が実感できる場の工夫と支援」で取り上げています。指示や発問に関しては基本的に、支援を必要としている子どもへの配慮から、一斉の指導に生かせることとして、「ゆっくり」「短い言葉で」「具体的に」話をする。そして、「ちゃんとしましょう」「まじめにしましょう」といった抽象的な言葉ではなく、例えば「プリントの計算問題を5問しましょう」という具体的な指示が大切です。具体的な内容を短い言葉で、適切な声の大きさで話すこと。子どもが何をすればよいのか分かるような指示の仕方をこころがけましょう。

学習環境も分かる授業をつくっていくために、大切なことです。詳しくは「3 どの子にも分かりやすい学習環境の工夫」で取り上げています。見通しや学習ルールを見える形で示すこと、板書の工夫などです。その他に、支援が必要な子どもにとって、大切なことがあります。それは座席の位置です。子どもの特性によって好ましい席の位置は異なります。注意の集中ができにくい子どもの場合、周囲の音や目から入る情報に左右されやすいので、教師が声をかけたり、ノートを確認したり、サポートしやすい場所にするのが大切です。人への関心が低く、集団の中で、言葉の指示を聞いていないことが多い子どもの場合、周囲の動きを見て行動することが多く見られます。したがって、モデルとなる子どもが隣や斜め前にいることで安心して行動できることが多いようです。

先にも書きましたが、多様な子どもたちがいるクラスのユニバーサルデザインは決まった形はありません。クラスの子どもの得意や苦手を把握した上で多くの子どもたちにとって分かりやすい授業構成の工夫や学習形態の組み込みを行っていきましょう。その上で、個別のニーズに応じた配慮や支援を行うのが大切です。個別のニーズへの支援は「4『分かる』が実感できる場の工夫と支援」で取り上げています。





3 どの子にも分かりやすい学習環境の工夫

授業を展開していく際に、私たち教師はたくさんの指示や発問をします。しかし、耳からの情報は消えてしまうため、子どもによっては何度も聞き返すことが予想されます。そこで、指示や発問の内容が見える形にし、分かりやすい授業ができる学習環境を整えましょう。

(1) 授業に見通しを持って取り組むための支援のポイント

① 授業の準備への見通し

授業がスムーズに始まるためには、授業に必要な用具を予め準備しておくことが必要となります。

1年生の授業を参観させていただいたときのことで、先生は、授業を2分早く終わらせて、次の授業の準備について、話し始めました。3時間目は国語です。先生は黒板の右端に右上のカードをはり、「次は国語です。絵のように準備をしましょう。一番、教科書…」と声をかけました。準備や片付けが苦手なひとみさんには同じ絵を小さなカードにしたものが渡してありました。



この他にも、机の上には何も置かない状態を風船で表す、筆箱や教科書の置き場所を机に色シールをはって示す、声の大きさのものさしを象やありの絵で示すなどの工夫がされていました。



用具の準備の仕方

この先生のように、「何をどのように準備する」「学習の場所は〇〇」などを絵や文字で示すことで、学習の準備が分かり、見通しを持って自分から取り組むことができます。

おんがく(おんがくしつ)
もっていくもの



教室移動と持って行く物

② 学習の流れに関する見通しの工夫 ー見える形で示すー

一日の学習の流れやそれぞれの時間に準備する物も見える形で示していると、言葉による指示だけでは取り組みにくい子どもにとっては分かりやすく安心です。しかし、黒板にたくさんの情報があると、学習の際に混乱することも考えられます。授業がすんだらカードははずしておきましょう。

一時間の授業の流れについても同様です。学習内容が確認できるよう、ミニホワイトボードや黒板の定位置に掲示します。授業の始めに「何をどのような順番で行うか」を子どもとともに確認します。学習に集中できにくい子どもには授業の途中でも学習内容を指し示し、

「今、何をしているか、後、どれだけすればよいか」を確認できるようにします。こうした支援は、低学年のうちから取り組むとよいでしょう。活用方法が分かると、友達同士の支援ができます。また、必要に応じて、個別に同様のカードを渡しておくで自分で確認しやすくなります。

国語の勉強

- 1 漢字ドリル
- 2 教科書
- 3 グループでの音読
- 4 練習問題

一時間の学習予定



一日の学習予定

③ 学習の際のルールを見える形で

学習の際のルールを絵や文字で示してあると便利です。発表や読みの際の声の大きさ、姿勢、発表時の挙手の方法など、学級の実態に合わせて掲示していくとよいでしょう。ルールが理解できたら、視覚的な支援は取り除いていきましょう。

④ 黒板の工夫

黒板には、その時間の学習のため、発問の要点や子どもの考え、まとめが簡潔に書かれており、授業内容をより確かに子どもたちに伝えられるような工夫が求められます。そこで、視覚的な手がかりを活用しながら板書の構造化を図っていきましょう。

- 手順や流れを書く(ページ, 学習の進め方, 学習する内容など, 必要に応じてカードで)
- 色チョークの活用(大事なところ, 注目させたいところに線を引く, 枠で囲むなど)
- 授業の流れや子どもの思考が分かるようにする。(吹き出しや小黒板の活用)
- 教科書の絵やイラスト, キーワードはカードも活用(授業展開が整理され, 振り返りやすい)
- 板書とノート的一致(図や表, 課題をプリントで行う工夫)

※教科によっても異なりますが、黒板はめあてや問題提示、内容の展開、まとめなどのように黒板を分割して学習内容を書くといった使い方を一定にしておくと、板書に見通しがつきます。

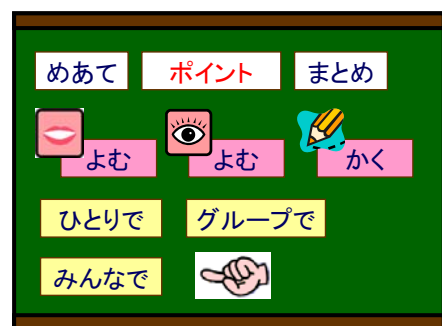
板書の際によく使う指示や発問、ポイントを示す矢印などはカードにしておき必要に応じて活用すると、子どもたちは注目したり見通しを持ったりできやすくなります。

板書の際のチョークの色とノートの取り方(白色のチョークは鉛筆で、黄色や赤色チョークは、赤鉛筆で書く)は授業の約束として伝え、定着を図りましょう。

支援が必要な子どもの中には、どこから書いたらよいのか分からない、黒板を見て写すのに時間がかかる、文字を書くのに時間がかかるといった様子が見られます。

こうした子どもたちに対しては、板書と同じワークシートを作成し、目標以外の文章を書く負担を軽減できるような工夫が必要です。

重要語句を()に穴埋めできるようにするのも一つの方法です。



あると便利な指示カード



板書とノート的一致 ワークシートの活用



4 「分かる」が実感できる場の工夫と支援

得意な学習スタイルや情報処理の仕方が異なる子どもたちが「分かる」を実感できる授業づくりでは、教師が、子どもたちの興味・感心、理解度などに応じた教材、教具の工夫をすることや学習形態を工夫しどの子ども認められる場をつくること、「分かる」を促すようなかわりをするのがポイントです。ここでは、それぞれの学習形態の中での教師のかわり方、場や教材の工夫などについて、具体例を示しながら支援方法を考えていきます。

(1) 自分の力を発揮し、認められる場や活動の工夫

日々の授業を見てみると、一時間の中に、一斉の学習、グループ学習、個別での学習が組み込まれています。子どもたちが「分かった」と感じられる場面は子どもによって異なります。子どもが成功体験を積み重ね、自信が持てるよう、本人のがんばりを周囲の子どもが認められるような支援を行い、意欲ややる気を育みましょう。

① 一斉の学習での支援

私たち教師は日々の授業の中で、笑顔、^{うなず}頷き、拍手などで学級に受容的な雰囲気をつくり、安心して学べるようにしたり、発問や指示を行う場合、声の抑揚や大きさ、テンポ、間合いなどに気をつけたりすることを心がけています。ここに示したのは、学級の中に、音の選択ができず、様々な聴覚情報を一気に受け取ってしまいがち、人への感心が低く全体の指示を聞きのがすことが多いといった子どもがいることも考慮した場の工夫とかわり方です。

○ 問題の理解や課題の遂行を支える発問や指示、場の設定

- ・話に注目しやすい環境を整える（注目できるようなアイテム：絵や写真など視覚的情報の提示）。
- ・「何を、どのように、どこまでするのか」など、具体的な言葉で短くはっきりと伝える。
(必要に応じて、手順やキーワードを板書しておくで安心して取り組める)
- ・前置きをする（「大事なことを言います」「これからすることを言います」など）。
※支援が必要な子どもには、近くに行って再度、個別の指示、手順、内容の確認をする。
- ・一つの指示で一つの活動ができるようにする。※自分の話が子どもにどのように伝わっているのかモニタリングすることで、子どもの反応に応じて柔軟に修正、支援ができる。

○ 理解したことを認められる場をつくる 一発表の予告や子どもが分かる場面での指名一

- ・みんなの前では緊張しがちな子どもや、どこを学習しているのか十分把握できていない子どもに対しては、事前に発表の予告（「次はこの列に発表してもらいます」など）をする。
- ・机間指導の際に、できていることを確認し「発表してほしいな」とメッセージを送り安心感を育む。

○ 気持ちやがんばりを受け止め、安心して発表できる雰囲気をつくる

- ・発表の際に詰まったり間違ったりしても、気持ちや態度を受け止めるなどプラスの声かけをする。
(その上で、「〇〇さんの伝えたかったことの続きが分かるかなあ」と発問し、友達の考えを推察し気持ちをつなぐとともに、めあてにせまることができるようにする)

○ 子ども同士の考えをつなぐ

- ・発表している子どもの発言を途中で止めて「〇〇くんはどう考えたのかな」と問い、友達の意見に注目できるようにし、考えを広めたり深めたりすることを支える。



② グループ学習での支援

低学年から、隣の子とも同士で自分の考えを発表したり友達の意見を聞いたりする場をつくることで、一人一人が認められ学びを深められるようにしていきましょう。また、グループ学習では、一人一人が得意な学習スタイルを使いミニティーチャーになれる場面をつくるのも工夫の一つです。

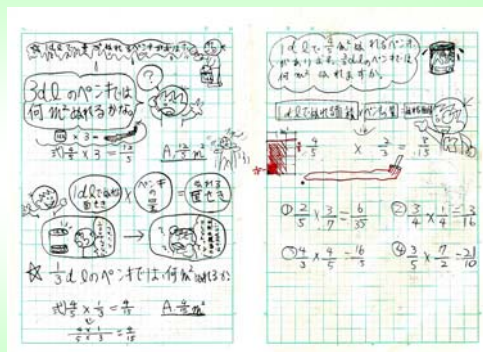
得意を生かして友達を支える

6年生の授業参観。分数のかけ算のところを学習していました。グループ学習をしている様子をのぞいてみると・・・

問題を解いているけいくんのノートを見ると、そこには式だけでなく、問題を理解していく際に、絵や図が書き込んでありました。けいくんは、自分なりに絵や図で問題を表現し理解につなげていました。

隣にいるしずかさんは、分数が少し苦手です。文章を読んで問題を理解することが難しいようでした。

その様子を見ていたけいくんは、しずかさんに絵を描きながら説明を始めました。



グループ学習で理解を深めていくためには、見て学ぶ、友達に教えることで自分の考えを確認する、競い合うなどの活動が組み込まれているとよいでしょう。また、グループで発表するような活動では、子ども一人一人が自分の力を発揮できるようなかわりができることが大切です。絵や図で問題の理解を促す、キーワードを書く、調べ学習をして資料を付ける、流れに沿って考えを発表する、ロールプレイをするなど、得意を生かし、役割をもって活動できるように支援しましょう。

③ 個別での学習についての支援

支援を必要としている子どもへの対応は、どの先生もできるだけ近くで個別に支援をしたいと思うことでしょう。実際には、一人の子どもに何分もつきっきりで指導することは困難です。そこで、一斉指導や机間指導をしている際の個への指示やかかわり方についてまとめてみました。

○ 子どもとの関係性をつくる

- ・結果や過程を認め、プラスの声かけを意識して行う。「偶然」の行動に対するアンテナを高くし、声かけをしていくことで「偶然」を「必然」に。子どもにとって誉めてもらいたい人になること。

○ 授業を妨げないかわり方（非言語の対応）で伝える

- ・問題行動には非言語の対応（表情、身振り、手振り）で。称賛や同意は、頷きや微笑みで伝える。
- ・視線を投げかける。（最小限の刺激ですむ。見つめているその意味を考えさせることができる。また、周りの子どもに伝わることで、周りの子どもの行動をモデルにすることもできる）
- ・望ましくない行動に注目しない。（行動に対して注意をするのではなく、表情で表す、視線を送る、対象となる本人に近づく、本人のすぐそばで全体に向けて指示をする など）
- ・側に行き、そっと背中や肩に触れる（子どもの理解や不安を支える）。

○ 学級全体の共通ルールの確認をすることで行動調整を促す

- ・「今日のルール」「日替わりポスター」を活用し、ルールに従って行動する必要があることを意識できるようにする中で、自分の行動を振り返ることができるようにする。

○ 集団に対する明確な流れを示す

- ・授業構成を一定の形にするなどの工夫の中で、することが決まっておりの子どもたちもその活動に取り組んでいる状況があると、落ち着き、安定した状態で学習に取り組むことができる。

④ 自分の力が発揮できる、課題遂行のための支援

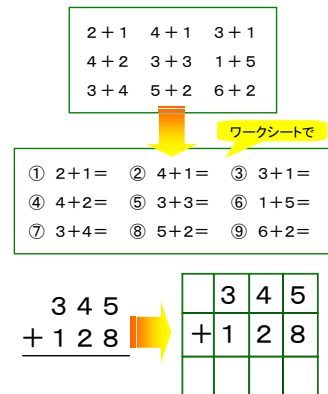
個別での学習では、支援を必要としている子どもの困難さを把握し、その時間のめあてと照らし合わせながら、理解を進められるような教材・教具の工夫を行なっていくことが大切です。

ここでは、子どもの困難さの要因や情報処理の仕方に着目して、具体的支援を紹介しています。

◆黒板の内容を書き写すのに時間がかかる子ども

算数の授業で黒板に書かれた計算問題をノートに写して回答することを例に挙げています。

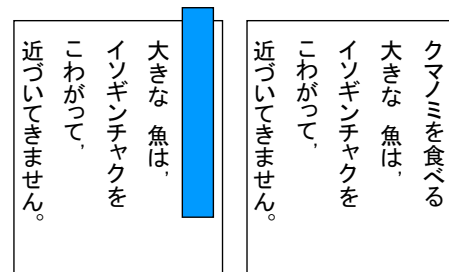
自分が黒板のどの部分を書き写しているのかがすぐに分からなくなってしまう、問題の順番を間違える、ノートに正しく転記できないという子どもにとっては、「黒板の内容をノートに書き写す」という作業はたいへんです。困難さの要因として、「形態や空間関係を視て憶えること」が考えられます。作業を減らし、ねらいの「計算問題を解く」ことができるための支援として「あらかじめ計算問題を記入したワークシートを配布する」方法があります。準備に当たっては、子どもの実態に応じて、穴あき式のプリント、マス目の大きいもの、罫線を引いた用紙を利用したものなどの工夫をしましょう。



◆「読み」に困難がある子ども

話は聞いて理解できるのに、読みになると、行を飛ばして読む、まとまり読みができにくいといった子どもにとっては、音読の場面は緊張とできにくさを実感することになります。困難さの要因として「注意を集中すること」「字句を目で追うこと」「字句の形態や空間関係を視て認識すること」「字句の音韻を聞いて憶えること」などが考えられます。

この状態では、読み理解も困難になります。そこで、支援としては、飛ばし読みに対しては「言葉のまとまりに丸を付ける」「助詞に丸を付ける」などの支援を、読む行を分かりやすくするためには「定規をあてる」などの工夫をします。教科書では読みにくい場合にはリライト教材（分かち書き、文字のサイズを大きくする、行間を広く取る）の活用もしましょう。



読み理解については、「文の内容を頭の中に思い浮かべ、まとめること（イメージ化）」ができることが大切です。文章の内容を絵や写真などで視覚的に提示すると理解しやすくなります。

◆「書き」に困難がある子ども

ノートを見ると、鏡文字が多い、文字がマスからはみだしている、文字の形がくずれていて、ねやはらいがかき分けられないなど、書くことができにくい子どもがいることに気付きます。

書くことが難しい要因として「字句の形態や空間関係を視て認識すること」「字句の形態を視て憶えること」「目と手の協応動作」などが考えられます。

「く」と「へ」、「し」と「つ」などを間違えて書いたり、鏡文字になったり、書き順が覚えられない子どもたちは、「上から下」「左から右」など書き始めの位置を示すと書きやすくなります。

教科書や黒板の文を一文字ずつ見て書き写す子どもには、書く言葉を教師が言うことで、比較的早く書くことができるようになります。最初は、教師が側について読み、しだいに、自分で声に出して読みながら書くようにするのもよいでしょう。また、板書の内容と同じものを手元に置いて、それを見ながら書くようにすると、比較的楽に書くことができます。

枠の中に文字が書けない、形が整わないという子どもは、目と手の協応がうまくいかないことが考

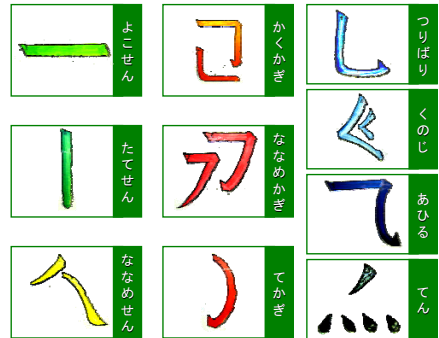
えられます。赤鉛筆などで薄く大きめに手本を書き、着目してほしい箇所の形を言葉で「しゅー」「ぴん」などとイメージできるよう声かけをすると意識して書くことができやすくなります。

書くことに困難さがある場合、たくさんの文字を書くことに意識がいき、問題を理解したり、考えたりすることに時間が足りなくなることも考えられます。書く量を加減し、できていることを細やかに評価し、意欲が継続するように支援しましょう。

◆漢字を覚えることが苦手な子ども

漢字を覚えるときに、繰り返し書いていく中で、子どもたちは縦、横、斜めなどを意識して覚えていきます。しかし、何度繰り返し書いても覚えることができにくい子どももいます。その要因として「継次的に処理すること」つまり順番に書くだけでは、意味付けができないことが考えられます。こうした場合には、漢字の形（パーツ）をヒントにしたり漢字が表す言葉のイメージをイラストで覚えたりする方法が考えられます。漢字の形（パーツ）に着目した方が覚えやすい子どもには、「台」という漢字を構成要素のカタカナの「ム」と「ロ」に分けて覚えるようにします。その際には、読み方と結び付け、「漢字の台はカタカナの『ム』と『ロ』と読みながら覚えるようにします。そうして、漢字の形に意味を持たせることができるようにすることが大切です。

最近では、認知方法に応じた漢字の本も出版されています。子どもの得意な認知方法を把握し、活用していくのもよいでしょう。

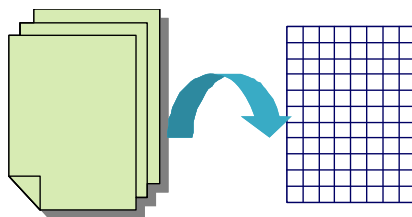


構成要素で覚える



イメージで覚える

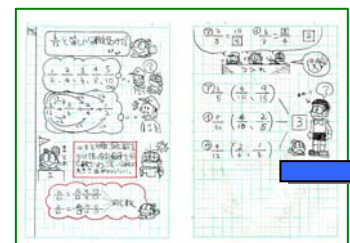
⑤ 課題の遂行を助けるためのアイテム



表は白、裏はマス目の計算用紙リンクを付けて机の横に常備



手順表は専用のメモ用紙で



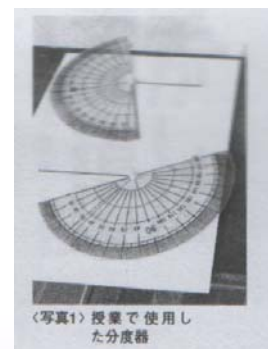
付箋が目印
次の時間はここから書く



左：「絵でおぼえる漢字の本」
監修 石井 勲 ポプラ社



残り時間を数字や量で把握



〈写真1〉授業で使
いた分度器

右：「下村式 唱えておぼえる漢字の本」
著者 下村 昇 偕成社

実践障害児教育
(学習研究社 2007.8)



温かな学級の中で

— いつもあなたのがんばりを見ているよ
すべての子どもへ届けたい教師のメッセージ —

「いつもあなたを見守っているよ」という先生のまなざしは、学級に温かい空気をきっと生み出すでしょう。それは、特別な支援を必要としている子どもだけでなく、学級のすべての子どもを包み込み、子どもたちが安心して学ぶことに、きつとつながっていくと思います。

今まで特別支援教育についてあまり知らなかった先生も、通常学級の学級経営や授業づくりに特別支援教育の視点をちょっと入れてみましょう。

この指導資料を読んでいただいた先生の中には、「この支援は、そういえば、あのときしたな」とか「この工夫は、今日の授業で取り入れたことだ」などと思いながら読んでいただいた先生もあるでしょう。

そうなのです。

特別支援教育の視点を学級経営や授業づくりに取り入れることは、難しいことではありません。いい学級になってきたなと思うとき、自分では気付かないうちに、多くのよい工夫や支援をしているのです。

この指導資料は、すべての先生方が、それらの工夫や支援を意識して、意図的にできるようになるために少しでもお役に立てることを願ってまとめました。先生方が学級づくりや授業づくりをする際に、ふっとこの指導資料のことを思い出し、ページをめくっていただければ幸いです。

— 算数の勉強は苦手。でも、先生とする算数の勉強は好き
〇〇さんと一緒だからがんばれそうだよ —

子どもたちのこんな気持ちが大きくふくらんで、学びが深まっていくことを心から願っています。



参考文献

■ 指導資料を作成する際に、参考にした文献を紹介します。

- ・佐藤正二, 相川充編著：実践！ソーシャルスキル教育 小学校, 図書文化, 2005
- ・本田恵子：キレイやすい子の理解と対応, ほんの森出版, 2005
- ・小林正幸, 相川充編著：ソーシャルスキル教育で子どもが変わる, 図書文化, 2006
- ・品川裕香：気になる子がぐんぐん伸びる授業, 小学館, 2006
- ・吉田昌義, 吉川光子ほか：つまずきのある子の学習支援と学級経営, 東洋館出版社, 2006
- ・青山新吾編著：特別支援教育 学級担任のための教育技術, 学事出版, 2007
- ・田中道治, 都筑学ほか：発達障害のある子どもの自己を育てる, ナカニシヤ出版, 2007
- ・本田恵子：キレイやすい子へのソーシャルスキル教育, ほんの森出版, 2007
- ・岡山県津山市立西小学校編著：学校で取り組む特別支援教育のヒント, 明治図書, 2008
- ・小島道生, 宇野宏幸ほか：発達障害の子がいるクラスの授業・学級経営の工夫, 明治図書, 2008
- ・小島道生, 石橋由紀子：発達障害の子どもがのびる！かわる！「自己決定力」を育てる教育・支援, 明治図書, 2008
- ・熊谷恵子, 柘植雅義ほか：長所活用型指導で子どもが変わる Part3, 図書文化, 2008
- ・佐藤慎二：通常学級の特別支援 今日からできる！40の提案, 日本文化科学社, 2008
- ・柘植雅義：特別支援教育の新たな展開, 勁草書房, 2008

本指導資料／執筆担当

岡山県総合教育センター 指導主事 篠田 千枝

編集兼発行所

岡山県総合教育センター
〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川 7545-11
TEL(0866)56-9101 FAX(0866)56-9121
URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>
E-MAIL kyoikuse@pref.okayama.jp

※本文中に挿入しているイラストは、MPC及び神奈川県立総合教育センターが作成したものを使用しています。

